

カンボジア通信

第9号 2009年4月30日発行

〒464-8610 名古屋市千種区今池2-1-10 河合塾 社会貢献事務局経営企画部内 河合塾カンボジア支援グループ

2008年6月末の1週間、河合塾カンボジア教育支援グループメンバーが現地を訪問し、実際に河合塾から支援している物資が使用されている様子や、これまで日本へ招聘していた生徒たちの様子を調査してきました。

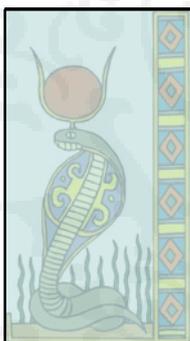
その前に…なぜ、「カンボジア教育支援」なのか！！

これまでの、河合塾のカンボジア教育支援活動をカンボジアの歴史とともに、振り返ります。

みなさんは、カンボジアが1970年から1991年の21年間、激しい内戦状態にあったことをご存知でしょうか？1991年といえば、日本はバブルと呼ばれる時代。一方、世界は湾岸戦争勃発やソ連の崩壊など激動の中にありました。そんな中、カンボジアは世界の大きな動きの影で、平和を取り戻すため、国連の平和維持活動（PKO）が1992年に開始され、政治、経済、教育、文化などの復興に取り組んできました。

お気づきですか？17年前に戦争が終わったのです。河合塾グリーンコースに通っている高校2年生や3年生のみなさんが生まれたころです。みなさんは、これまでどのような環境で育ち、学んできましたか？日本も戦争を体験しましたが、戦後の復興を驚異的なスピードで成し遂げ、世界の先進国となりました。ですが、戦争を知らない私たちは、戦後17年間をその人たちがどうやって生きてきたかも知りません。戦後を生きだした大人たちはどんな気持ちで子どもたちを見てきたのでしょうか？戦後に育った子どもたちは何を考えていたのでしょうか？

まさに今カンボジアに生きている大人・子どもたちは、戦後に生きているのです。その中で、命の引継を行っているのです。先にその経験をし、そこに得たものがあるから、私たちは『河合塾という教育機関だからこそできる支援を日本の子どもたち同様、カンボジアの子どもたちにも提供していきたい』というのが活動の趣旨なのです。これまで、たくさんのお机やイス、文房具などを送りました。河合塾の講師、牧野先生、金先生、露木先生などの有志のおかげで、寮の建設や黒板の購入なども行ってきました。そして、私たちがカンボジアという地で得た感動から日本を振り返るように、彼らにも何かを得て欲しいと願い6年間に渡ってカンボジア-日本友好学園から生徒たちを日本に招聘してきました。



「ハード面は確立された。これからはソフト面をより進展させなければならない。これからのカンボジアの教育の課題だ。」カンボジア教育支援にかかわる私たちの共通理念です。暗記中心の数学、実験のない理科科目、化学教師が教える英語の授業…。このような教育環境から脱する時期に来ているといえるというのが、私たちの見解です。（福岡校／福島）

カンボジアを訪れて、いちばんに思い出されるのは『カンボジアの夜空』です。生まれて初めて生で見た天の川や流れ星。夜空を見上げる私たちの周りでは蛍が飛んでいて…。言葉では言い表せないほど、感動的な景色でした。夜空の星のように、私たちも『地球』というひとつのフィールドで生きるものとして、国境や人種を越えて、それぞれが輝ける存在でいられる世界が1日でも早く訪れることを願っています。（天王寺校／福永）



■ 招聘した生徒たちの今

2001～2007年の6年間にわたり、河合塾が毎年夏行なってきた生徒招聘。日本へ招聘した生徒たちの多くは、友好学園を卒業後、今は大学生となっています。皆、日本へ来たことをはっきりと覚えていて、当時の出来事などを話してくれました。今年大学4年生になった友好学園1期生は、来年卒業予定。政治家になりたい、経営者になりたい、医者になりたい、デザイナーになりたい、などそれぞれが持っている夢は様々ですが、その目標を叶え、カンボジアだけでなく、世界の未来へ貢献してくれることを願っています。

■ 高校卒業試験

カンボジアの高校生は、『高校卒業試験』に合格しなければ大学入試を受験することができません。友好学園1期生の合格率は30%で程度でしたが、日本からの支援や先生方の熱心な指導の成果で、今年卒業した4期生の合格率は80%以上にまで伸びています。その一方、合格数の伸びに伴い、大学教育の質の低下や、大学卒業後の就職の問題が表面化してきています。カンボジアの高等教育は収益確保を重視し、教育の質をおざなりにしたため、大学を卒業しても就職できるのは10人に1人という状況…国の発展に貢献したいという学生の思いとは裏腹に、厳しい現実があります。



■ 友好学園のパン屋さん

友好学園のあるプレイベン州は電気がないため、「朝は早起きし、夜は早く寝る」という生活スタイルです。学校の授業は朝8時ごろから始まりますので、朝食を学校近くの食堂で食べる生徒も多くいます。その様な子どもたちのために安く朝食を提供できるように、また、利益を友好学園の運営に役立てることができるようにという目的で、今年、友好学園にパン屋さんができました。カンボジアのパンは、バターをあまり使わないため驚くほど軽いのが特徴ですが、友好学園のパンは米粉を使い、中身がぎっしり詰まっており、腹持ちが良いため、村の人からも人気があるそうです。現在は1種類のパンしか販売しておりませんが、生地に芋を混ぜたり、トッピングをしたり、と種類を増やせるように試作中ということでした。



■ 未だに不足している教育物資

戦後17年が経過し、『学校』の数自体は増えてきつつありますが、それでも机やイスは不足しています。最近、テレビ番組や芸能人の方がカンボジアにたくさんの学校を建設しているのをご存知でしょうか？しかし、実際にそれらの学校を訪れてみると、生徒は教科書やノート、鉛筆などの文房具を持っておらず、先生もおらず、教育環境はまだまだ充実したものとは言えません。そのような環境の中でも、子どもたちは一生懸命学んでいます。私たちが教室を覗くと、笑顔で挨拶をしてくれました。



『友好学園の学生と卒業生に会って来ました!』露木 繁(東日本地区 数学科講師)

★★ 格差社会で遅く生きる卒業生 ★★

プノンベンの住宅地には、ちょっとした城のような大きな家がたくさんあり、まるで日本の高級住宅街を歩いているようです。一方、そこからさほど離れていないところに住む友好学園の卒業生たちは、都会で最底辺に近い生活を送っています。今回訪問した大学生の住居は、8畳ほどのアパート。その1室に4人で暮らしています。部屋に窓はなく、隣からは工場の機械の音が聞こえ、湿度が高く、風通しも良くないので、息苦しい感じがします。それでも、学生たちは元気です。彼らにとっては、大学に通えていることだけでも非常に幸運なことですし、日本の若者よりはるかに大きな希望を持っているからでしょうか。

★★ 河合塾の有志で支援している大学生寮 ★★

河合塾の有志で提供しているプノンベンの『大学生のための寮』も1年が経ちました。現在は25名以上の大学生が2つの家に住んでいます。はじめに紹介した大学生の劣悪な住環境とは違い、こちらに入った学生は良い環境と同郷の友人たちとの暮らしに満足しているようです。このような住環境が多数提供できれば良いのですが、多くの学生は、まだまだ劣悪な環境で暮らしていました。

★★ 友好学園の生徒の学力 <数学力> ★★

7年生に日本語と数学の授業を行いました。分数の問題(1/2+1/3+1/5など)は、きちんと解ける生徒が多かったので安心しました。11年生と12年生に3時間ほどの数学の授業も行いました。「三平方の定理」の復習と「サイン・コサインの定義」の確認です。日本では高校1年生程度の内容ですが、生徒たちはそれなりに理解してくれました。ただし、カンボジアの12年生の教科書は、日本の理系受験生から大学1年のレベルなので、生徒が理解しているようにはとても思えません。思考力をつけるような訓練を中学の段階からきちんとやる必要があると思います。また、教科書は2人で1冊、休暇中は図書館に返却し、学生が所有するわけではありません。1人1冊の教科書はあった方がよいでしょう。

★★ 友好学園の生徒の学力 <英語力> ★★

友好学園の生徒の英語力はかなり弱いそうです。数年前まで高校卒業試験に英語がなかったので、英語教育が遅れているようです。現在、友好学園で英語を教えているのは、化学や生物の先生です。英語専門の教師はおらず、現在は韓国系のオーストラリア人の大学生が数ヶ月滞在して教えているようです。英語教育の専門家が行けば、貢献できると思われます。



募金収入 <会計報告>

2007年度(4月～3月) ¥1,008,385

2008年度(4月～3月) ¥ 964,095

ご協力、ありがとうございました。